

ハリウッド映画の中の「聖なるもの」 ——映画 “I am legend” エンディング改変の理由を考える——

沼 尻 正 之

“The Sacred” in the Hollywood Movies Considering the change of the ending of “I am legend”

Masayuki NUMAJIRI

要 約

本稿は、ハリウッド映画の持つ「宗教性」について考察することを目的としている。この問題について考える上で、まずハリウッドの「宗教映画」には3つのタイプがあることを論じる。第1は、聖書の物語を映画化するなどした、いわゆる宗教映画であり、第2は、ストーリーの重要な要素として宗教が使われている、宗教的モチーフ顕在型の映画、第3は、表立って宗教性は見られないが、背景に宗教的要素が隠されている、宗教的モチーフ潜在型の映画である。

この議論を土台にして、後半では、2007年のアメリカ映画「アイ・アム・レジェンド」を、分析の対象とする。この作品を取り上げたのは、それが一見すると上記第3のタイプの作品のように見えながら、実は元来そうした作品ではなかった、という特殊な事情を持つ作品だからである。この作品は、公開直前にエンディングが改変されていたのである。

では、この作品のエンディングはなぜ改変されたのか、また改変されたもの、そして改変される前のものは、それぞれどのような作品として解釈されるのかを、原作であるリチャード・マシスン『アイ・アム・レジェンド』や、それを映画化した過去の2作品などを参照することにより、明らかにしたい。それにより、ハリウッド映画が宗教的要素を取り込む際の問題性もまた、明らかになるであろう。

キーワード：ハリウッド映画、宗教、宗教文化、キリスト教、「アイ・アム・レジェンド」

1. はじめに

今日われわれは、グローバル化が進む世界に生きている。そうした現代世界に生きるわれわれには、自分たちとは異なる「他者」の文化をよく知ることが求められている。もっとも、一口に文化といっても、実際には様々なかたちの文化が存在している。その中でおそらく最も不可解であり、かつ相互に理解しがたいものと考えられているのが、「宗教文化」であろう。それは、世界の多くの人々にとって、それぞれの文化の根幹を成す、極めて重要性の高い「文化」である。

近年、宗教的差異が、世界各地で起こっている紛争やテロの原因であると指摘されることも、稀ではない。それは、必ずしも正確ではない言い方である場合も多いが、少なくとも大規模な対立の口実とされてしまうこと自体が、宗教というものの持つ重要性を示していると言えるであろう。

われわれが、他者の宗教文化を知ろうと思った場合、その役に立つ材料は様々な存在するが、中でも映画は、かなり重要なツールだと考えられる。本などの活字メディアは、情報量が多いかもしれないが、活字を通して他者の宗教文化を知るには、多くの時間と、かなりの忍耐力を必要とする。それに比べると、映像メディアとしての映画は、場合によっては、短時間で一つの宗教文化の本質とは言わないまでも、その概要や、実際の姿を、一気に理解させる力を持っていると思われるからである。

そのことと関連して言うならば、現在日本では、宗教学者たちを中心に、「宗教文化士」なる資格を制定しようとする動きが具体化しているのだが、ここでもやはり映画は、学生に宗教文化を理解させるための重要なツールと位置付けられている。実際、例えば2009年の9月には、國學院大学の主催により、「映画の中の宗教文化」という国際研究フォーラムが行われ、国内外の研究者たちが、宗教文化教育に映画をどのように利用することができるかというテーマについて、多岐にわたる議論を行った。また、そのシンポジウムに参加したメンバーを中心に、宗教文化教育のための一つのテキストとして、『映画で学ぶ現代宗教』（井上編[2009]）という本が編まれている。それらにおいては、利用の仕方は様々であるにせよ、映画が他者の、また場合によっては自己の宗教文化を知るための、極めて有用なツールであることが、確認されていた。

本論文では、そうした問題意識に基づき、特にハリウッド映画の中に宗教はどのようなかたちで現出しているかという問題を改めて考察し、その上で一つの興味深い事例として、近年のヒット作である「アイ・アム・レジェンド」という作品を取り上げ、その「宗教性」について検討したいと思う。ハリウッド映画を取り上げる理由としては、勿論まずもって今でもなおアメリカという国が映画産業の中心であり続けていること、そしてこの国が先進国の中では例外的に「宗教的」な国であることが、挙げられる。また「アイ・アム・レジェンド」という作品を特に取り上げるのは、詳細については後述することになるが、この作品の「エンディング改変問題」が、現

在のハリウッド映画と宗教との関係を考える上で、注目すべき論点を含んでいるからである。

2. ハリウッド映画における「宗教」

ハリウッド映画における宗教を考える際に、映画の中で宗教がどのような位置におかれているかによって、少なくとも3つのパターンを考える必要がある。まず一つ目は、宗教それ自体が作品のメインテーマとなっている、「いわゆる宗教映画」である。次に二つ目は、作品の主たるテーマは宗教ではないが、物語の重要な要素として宗教が登場する、「宗教的モチーフ顕在型」の映画である。そして三つ目は、表面的には宗教的要素はないように見えるが、その背後に宗教的モチーフが隠されているような、「宗教的モチーフ潜在型」の作品である。以下ではまず、この3つに分けて、ハリウッド映画における「宗教」の位置を考察してみよう。なお以下の議論に関しては、栗林[2003]、栗林[2005]、服部[2003]などを参考にしている。

2-1. いわゆる宗教映画

アメリカ文化の宗教性を反映して、ハリウッドではこのタイプの映画が、既に20世紀初頭から、作られるようになっていく。第二次大戦前の代表的な作品としては、1918年公開のD. W. グリフィス監督による「イントレランス」や、C. B. デミル監督の「キング・オブ・キングス」(1920年)などがある。

しかし、このタイプの作品が数多く作られるようになるのは、やはり第二次大戦後のことである。ハリウッドではこの戦後の映画黄金時代に、巨額の制作費を使った超大作の宗教映画がいくつも作られている。一例を挙げるなら、C. B. デミル監督の「十戒」(1956年)、ニコラス・レイ監督の「キング・オブ・キングス」(1961年)、ジョン・ヒューストン監督の「天地創造」(1966年)などである。1970年代以降は、進歩的な時代の雰囲気も反映して、このタイプの作品はあまり作られなくなる。作られるとしても、例えば、ノーマン・ジェイソン監督による「ジーザス・クライスト・スーパースター」(1973年)のようなミュージカル作品など、やや変則的な作品ということになってくる。

その後、このタイプの作品は次第に減少しつつあるが、まれに作られる作品の中には、社会の中で大きな議論を巻き起こすような、問題作が目立つようになる。その代表例が、マーティン・スコセッシ監督の「最後の誘惑」(1988年)であり、メル・ギブソン監督の「パッション」(2004年)である。「最後の誘惑」は、人間としてのキリストが、死の直前に見た夢を映像化した作品であり、キリスト＝神という図式を相対化したため、福音派などの宗教的保守派たちから、強い批判を浴びせられることとなった。

また、「パッション」は、自身熱心なカトリックの信者であるメル・ギブソンが、私財を投げ打って制作した宗教映画である。映画は、イエスが十字架で処刑されるまでの半日を、細かく描いた

歴史ものだが、登場人物たちに、アラム語やラテン語など、実際に当時使われていた言葉をしゃべらせるなど、徹底した時代考証を行っている。内容的には、実にまっとうな宗教映画なのだが、キリストが受けた拷問をリアルに再現する残酷描写が、あまりにも過激だったため、映画館内でショック死する人が出るなど、そうした面で社会問題を引き起こした。

これらの事例は、宗教を正面から取り上げることが、いきおいチャレンジングなものにならざるを得ない、現代世界の状況を象徴しているように思われる。

2-2. 宗教的モチーフ顕在型

3つの分類の中で、最も多くの作品が属するのが、このカテゴリーである。ストーリーの重要な要素として宗教が含まれている、このタイプの作品は、コメディ、恋愛、ミステリ、サスペンス、ホラーなど、多くのジャンルにまたがって存在している。ヨーロッパや、日本などに、こうしたかたちで宗教的要素を取り入れた作品が、それほど多くないことを考えると、このタイプの作品の層の厚さは、ハリウッド映画の大きな特徴だと言えるだろう。

ここに分類される作品は、あまりにも数が多いので、統一的な特徴などを描き出すことは困難である。したがってここでは、いくつかの代表的作品を例として挙げることで、そのかわりとするこことしたい。

「エクソシスト」：ウィリアム・フリードキン監督、1973年。日本を含む世界各国にホラー映画ブームを巻き起こした作品。アメリカに住む女優の娘に取り憑いた悪魔と闘う神父の姿を描く。こうした悪魔祓い師＝エクソシストは、欧米に今でも実在するのだが、そうした教会と悪魔との闘いを、リアルに描いた作品。最近でも「エミリー・ローズ」など、類似の作品が繰り返し制作されている。

「刑事ジョン・ブック／目撃者」：ピーター・ウィアー監督、1985年。殺人事件を目撃したことで命を狙われる子供とその母親、彼らを守るために、一人の刑事が、母子が属するアーミッシュという宗教共同体で生活を送る。ストーリーはごくありふれたものだが、アーミッシュの生活を詳細に描いた点に特徴のある作品。この映画により、文明を拒否して質素な暮らしを続けるアーミッシュの人々の存在が、世界中の多くの人々に知られることとなった。

「奇蹟の輝き」：ヴィンセント・ウォード監督、1998年。リチャード・マシスン原作。事故で命を落としたクリスは天国へ召されるが、その妻のアニーは自殺したため、地獄に落とされる。クリスはアニーを救うため、天国から地獄へ向かう。当時最先端のCGで天国や地獄を映像化したことが話題になった作品。キリスト教の他界イメージを知ることができる。

「僕たちのアナ・バナナ」：エドワード・ノートン監督、2000年。幼なじみの女性アナ・バナナをめぐる争う親友の二人、ジェイクとブライアン。ジェイクがユダヤ教のラビ、ブライアンがカトリックの神父であったことが、この三角関係を複雑なものにする。都会に住む聖職者たちの暮らしや、各宗教の戒律などが、具体的によく分かる作品。

「ダヴィンチ・コード」：ロン・ハワード監督、2006年。ダヴィンチの名画に隠された謎が、キリスト教をめぐる人類史上最大の秘密へとつながる事件を、宗教象徴学者ラングドンが解明する。その秘密は、キリスト教の根幹を揺るがしかねないものだった。日本でもヒットした作品で、その後、こちらでもキリスト教会と深く関わる内容の続編「天使と悪魔」が、映画化されている。

以上、ごく一部ではあるが、このタイプに含まれる作品が、いかにバラエティに富んだものであるか、分かるであろう。他にも、「愛のイェントル」(1983)、「天使にラブソングを」(1992)、「セブン」(1995)、「エンド・オブ・デイズ」(1999)、「ブルース・オールマイティ」(2003)、「リーピング」(2007) など、ここに分類される作品は、枚挙にいとまがない。

2-3. 宗教的モチーフ潜在型

ここに分類される作品は、数は決して多くはない。しかし、その数少ない作品の多くが、歴史に残る名作とされている点が、このタイプの特徴である。その理由は、単純には総括し難いが、おそらく、表立ったストーリーの背後に隠された宗教的モチーフが、作品に深みを与える効果を持つ、そういったことが作用しているのではないかと思われる。

このタイプの作品のもう一つの特徴は、異なる宗教文化圏に属する者には、そのモチーフがきわめて分かりにくいというところにある。キリスト教文化圏に属する者には、さほど困難ではない、隠されたモチーフの解釈が、例えば日本人には、非常に困難である、という事態が生じるのである。その意味で、このタイプの作品は、宗教文化の「教育」に、ふさわしいものであると言えるかもしれない。具体例としては、以下のような作品が、このタイプに分類される。

「未知との遭遇」：スティーブン・スピルバーグ監督、1977年。言わずと知れた、スピルバーグの出世作だが、このSF超大作は、明らかに旧約聖書の、特に「出エジプト記」を念頭に置いている。そのことは例えば、映画の前半で、主人公のロイが、家族と見ている映画が「十戒」であるといったかたちで、小出しにされるのだが、何よりも決定的なのは、ラスト近くで人間からの呼びかけに応じて、UFOが飛来するシーンである。ここでの一連の場面は、「出エジプト記」19章の記述と酷似している。従って、ここで登場するUFOは、シナイ山に現れる神のアナロジーと見ることができるだろう。ユダヤ人であるスピルバーグは、そのフィルモグラフィーの節目節目で、自らの宗教性・民族性を投影した作品を作り上げている¹⁾。

「E. T.」：スティーブン・スピルバーグ監督、1982年。同じスピルバーグが、キリスト教のモチーフを込めた作品がこれである。これは、宇宙人と人間の子供たちとの交流を描いたSFファンタジーだが、ここに登場するE. T. は、少年の傷に触れるだけで、それを癒してしまうなどの奇蹟を行い、一度死亡してから復活し、そして天に昇っていくという、イエス・キリストを思わせる存在として描かれている。主人公のエリオット少年の母親の名前がメアリー(マリアの英語名)であることも、偶然ではないだろう。何より、あのE. T. と少年が指と指を合わせる有名な場面は、ミケランジェロの名画「アダムの創造」を思わせる。そこで人間(アダム)と指に触れ合うE. T.

は、創造の父としての神なのである。

「ターミネーター2」：ジェームス・キャメロン監督、1991年。機械が人間を支配している未来社会、機械文明の中枢スカイネットは、将来人類を救う救世主となるジョン・コナーを、子供の内に抹殺するため、T1000型のロボットを過去に送り込む。これに対し、ジョンと母のサラは、旧式のターミネーターT800の助けを借りて、死闘を挑む。この、救世主を子供の内に抹殺しようとするという話は、新約聖書の「マタイによる福音書」に出てくるヘロデ王の物語と酷似している。つまりジョンは、未来の救世主キリストなのである。実際、ジョン・コナー（John Conner）のイニシャルJ.C.は、イエス・キリスト（Jesus Christ）のそれと同じである。勿論これは、偶然ではない。

「グリーンマイル」：フランク・ダラボン監督、1999年。双子の少女をレイプし殺害した罪で投獄されている（後に冤罪であることが判明する）死刑囚ジョン・コーフィー、彼は看守たちの病気を治すなど、奇蹟を行う。この主人公も、イニシャルがJ.C.であることが示すように、キリストをイメージした人物であり、数々の奇蹟は、キリストが行ったとされる病気治しを思い出させる。電気椅子での処刑シーンが、イエスの磔刑の場面についての記述と重なること、死刑場に続く道・グリーンマイルが、ゴルゴダの丘へと続く「悲しみの道」をイメージさせることなど、この作品も、キリスト教のモチーフを隠している。

「マトリックス」：ウォシャウスキー兄弟監督、1999年。「マトリックス・リローテッド」「マトリックス・レボリューションズ」と合わせて三部作の作品。NYで平凡なプログラマーとして働くトマスには、凄腕ハッカー「ネオ」という裏の顔があった。ある日ネオは、トリニティという謎の美女に導かれ、モーフィアスという男と出会う。彼はネオに、「この世界は現実ではない」と告げる。自分の住む世界が、コンピュータが作り出した仮想現実世界だと知ったネオは、人類最後の都市ザイオンを死守する反乱軍の一員となり、仮想現実世界マトリックスを支配する人工知能勢力との闘いに身を投じるのだった。ここでのネオが、救世主キリストをイメージした人物であることは、彼が一度死んだ後に復活するといった展開からも、明らかだろう。彼に常に寄りそう女性が、トリニティ（三位一体を意味する）という名前であったり、彼らが死守しようとする都市がザイオン（シオンの英語読み）という名前であったりと、作品中にはキリスト教的なモチーフがあふれている。そもそも、今のこの世界が真の世界ではないという考え方は、キリスト教に昔からある千年王国説そのものである。様々なSF的設定を取り除いてみると、その中心にあるのは、まさにキリスト教的世界観の真髄に他ならないのである。

以上、いくつか例を挙げてきたが、このタイプに属する作品には、多くの観客を動員した有名なものが多いことが分かるであろう。そのことが—これが以下でのテーマとなる点なのだが—、自らの作品をこのタイプのものにしたいという欲求を、映画制作者や監督に与える面があるのかもしれない。

3. 映画「アイ・アム・レジェンド」を考える

さてここまでの議論を受けて、この章では、近年のハリウッドを代表する「宗教映画」として、2007年に公開された、フランシス・ローレンス監督、ウィル・スミス主演の「アイ・アム・レジェンド」を取り上げてみたい。これは、リチャード・マシスンが1954年に著した傑作SF小説『アイ・アム・レジェンド』²⁾を映画化した作品である。この作品は、約1億5000万ドルの制作費をかけて作られた、いわゆるハリウッドの娯楽大作映画であり、日本においても公開に際してテレビCMをはじめ、多くの宣伝活動が行われ、大規模な観客動員を果たした。最終的に世界全体での興行収入が、約5億8000万ドルというデータがあるから、まずまずのヒット作と言ってよいだろう（IMDbのHP参照）。しかしながら、この「アイ・アム・レジェンド」は、非常に奇妙な作品である。まず始めに、簡単なあらすじを確認しておこう。

3-1. 「アイ・アム・レジェンド」とは

舞台は2012年のニューヨーク・マンハッタン。主役のウィル・スミスが演じるのは、かつて軍隊に所属していた医学研究者のロバート・ネヴィルである。その3年前に、ある種の伝染病によると思われる、地球規模の大災厄が発生したことから、地球上の人類はほぼ死滅している。ニューヨークは、すっかり荒れ果てた状態になっており、マンハッタンの中心部も、植物が生い茂り、野生の動物たちが闊歩している。ネヴィルのまわりには、人間は誰一人おらず、彼は飼い犬のシェパード、サムと暮らしている。彼は、自分以外の人間の生存を信じて、電波を通じて世界にメッセージを送っているが、何も返答はない。

伝染病に罹った人々の多くは死亡したが、中にはゾンビのような化け物として生き残った者たちもあり、それは「ダークシーカーズ」と呼ばれている。暗闇の中でしか活動できないこのダークシーカーズは、夜になるとネヴィルに襲いかかってくるため、彼は日々この化け物と戦っている。

そんなある日、彼は一人の女性とその小さな息子に出会う。彼らも、ネヴィル同様、人類絶滅の危機を逃れた生存者であり、しかもバーモント州に、生存者のコロニーが存在するらしいという情報を、彼にもたらす。半信半疑のネヴィルだったが、他方で彼は、それまでの研究が実り、ついにダークシーカーズを人間へと戻すことのできる治療薬の製造に成功する。成功に喜ぶネヴィルたち、しかしその時彼らはダークシーカーズたちに襲われ、ネヴィルの実験室に追いつめられてしまう。そこでネヴィルは、完成した治療薬を母子に託し、自らはダークシーカーズたちを巻き込んで自爆するのだった。

以上が、「アイ・アム・レジェンド」の簡単なあらすじである。この映画の公開後、活字媒体やネット上などで、様々な作品批評が発表されたが、その中に、この作品を「キリスト教的」だ

と評するものが、少なからず見られた。もちろん、「アイ・アム・レジェンド」には、明示的な宗教への言及は見られないから、それらは先ほどの分類で言うところの「3. 宗教的モチーフ潜在型」の作品として、この映画を評したということを意味する。つまり、ネヴィルは、人類の救済のために、自らの命を投げ出した、殉教者キリストだというのである。

3-2. 「宗教的」映画としての「アイ・アム・レジェンド」

「アイ・アム・レジェンド」をキリスト教的映画であるとした批評の例を、ここで一つ取り上げてみよう。管見に入る限り、こうした趣旨の最もまとまった批評を展開したのは、映画批評サイト「映画にみるキリスト教文化と聖書」³⁾である(2008年7月12日エントリー)。そこには、以下のような記述が見られる(以下抜粋)。

ウィルス発生源のNYの科学者がひとり生き残った。なぜなのか。何かの使命があるに違いない。使命とは人類を救うことにちがいない。そんなロバートは、誰かに似ていないだろうか。

主人公のモデルとなっているのはイエス・キリストである。

映画のタイトルは「アイ・アム・レジェンド」。私は伝説。私は伝説になったほどの著名な人物だ。といった意味である。では、私とは誰か? 著名で誰もが知っている人物。

欧米人をはじめとするキリスト教文化圏で育った人にとっては、タイトルを見ただけで「私」とは誰のことを指すのかはすぐにわかる。

悪(ダークシーカーズ)を清める、つまり罪を贖わなければ人類は救われないからだ。エデンの園でアダムとイヴが善悪を知る木の実をとって食べたそのときから、人類は労働と産みの苦しみから逃れることができない罪深い人間となった。そんな人類を救うため、父なる神は子なるイエスを地上に遣わされた。

人類を救う使命を負った男。だからロバートはウィルスの発生源であるNY(地上)に留まり続け、ダークシーカーズ(悪に染まった人類)を救うべくワクチンの研究をつづけているのだ。

キリスト教文化にピンときた人には、ロバートのラストが予想できていたとはいえ、やはり心打たれるラストであろうと思います。タイトルの意味をかみしめながら、伝説になった著名な人物に思いをはせるSF作品ということを入念に入れてから観にいくとよいでしょう。

この映画評の言うところは明快であろう。実のところ、私自身も、この作品をはじめて劇場で見たときに、ほぼ同じようなことを考えた。つまり、ネヴィルは明らかにキリストをイメージした人物であり、これは前述の分類の「3」に該当する作品だ、ということである。

しかし他方で、その時どこか違和感が残ったのも事実である。つまり上記のような解釈では捉えきれない「残余」が存在する、もっと言えば、作品中に明らかに回収されずに終わっている伏線が存在するように、思われたのである。それはとりわけ、ダークシーカーズの描き方と関係し

た部分に顕著に見られる。映画の中盤でネヴィルが、当初単なる化け物だとは思っていなかったダークシーカーズが実は、知能や集団性や、更には愛情のようなものも持った存在なのではないかと気づきかける場面がある。にもかかわらず、映画はその伏線を全く生かすことなく、ネヴィルと単なる怪物としてのダークシーカーズをともに爆殺して終わるのである。

この時感じた違和感を再び思い出すことになったのは、この作品のDVDの発売が告知された時である。その際DVDには、特典映像として「衝撃の別エンディング」が含まれることが発表された。より詳しく言うと、その別エンディングとは、監督のフランシス・ローレンスが当初作品の結末として考えていたもの（以下これを「オリジナル・バージョン」と呼ぶ）であり、その後一般公開直前になって、何らかの事情により、結末が異なるエンディングに急遽差し替えられていた（こちらを「公開バージョン」と呼ぶ）ことが、明らかになったのである。

そうなるとう然然気になるのが、なぜそうした差し替えが行われたのか、その理由は何かということになるのだが、これについては、現在に至るまで、監督や制作者など、この作品の関係者の口から、明確な説明は成されていない。したがって、われわれとしては、その理由を推測することしかできないのである。

では、オリジナル・バージョンは、公開バージョンと、どのように異なるのか。そのことについて話を進める前に、同じリチャード・マシスの原作『アイ・アム・レジェンド』を映画化した、過去の2作について触れておきたい⁴⁾。

3-3. 『地球最後の男』と『オメガマン』

さて、先にも述べたように、ウィル・スミス版の「アイ・アム・レジェンド」は、リチャード・マシス原作の初めての映画化ではない。この作品を初めて映画化したのは、シドニー・サルコウとウバルド・ラゴーナの両監督である。彼らは、1964年に、名優ヴィンセント・プライスを主演に据えて、映画『地球最後の男』を完成させた。この作品のストーリーは、およそ以下の通りである。

未知の感染症により、人類が死滅して3年目の1968年、一人生き残ったロバート・モーガンは、毎晩襲い来る吸血鬼たちと戦っていた。そんなある時、彼の元に一人の女性が訪ねてくる。彼女によれば、人間と吸血鬼の中間的な生き物が存在し、彼らもまたロバートを狙っているという。彼らはロバートを「伝説の存在」として怖れているというのだ。実際ロバートは、その後教会で彼らの手により殺されてしまう。

これまでの映画化3作の中では、ある意味で最も原作に近い作品とも言えるのだが、女性が伝えた中間的な生き物の正体が不明であることや、彼らがロバートを怖れている理由が描かれていないことなど、映画としての完成度はお世辞にも高いとは言えない作品である。

次に作られたのが、1971年のボリス・セイガル監督作品「地球最後の男・オメガマン」である。この「オメガマン」は、前作がやや地味な印象の作品だったのに比べると、主演に「ベン・ハー」

などで知られる大スター、チャールトン・ヘストンを配し、セットや撮影にもかなりの予算をかけたと思われる、いわゆるハリウッドの娯楽大作映画である。こちらは、およそ以下のようなストーリーである。

細菌兵器による戦争で荒廃した同時代のアメリカ、自ら開発した血清によって生き残った科学者のロバート・ネヴィルは、マサイアスと呼ばれる化け物と化した人間たちと、ただ一人戦っている。生存者は自分だけだと思っていたネヴィルだったが、ある時黒人女性のリサと出会い、医学生のだッチなど他にも生存者がいることを知らされる。マサイアス化しつつある少年リッチーを救うため、治療に専念するネヴィルとリサ、そのかいあってリッチーは全快するが、その後マサイアスたちに殺されてしまう。その後リサもまたマサイアスになってしまい、他の仲間たちとネヴィルの命を狙ってくる。マサイアスを人間化する血清を完成させたネヴィルは、リサを救おうとするが、逆に彼らに追いつめられる。彼は、かけつけただッチに血清を託すと、息を引き取るのだった。

この映画でマサイアスは、単純に人間の生存を脅かすだけの絶対的な悪であるが、それにしても、お互いに普通に会話をするなど、限りなく人間に近い存在として描かれている。対する、チャールトン・ヘストン演じるネヴィルは、まさしく正義のヒーローであり⁵⁾、もっとはっきり言うならば、イエス・キリストのイメージを担う人物として描かれている。彼は、人類の未来のために、自らの命をなげうった殉教者なのである。映画の中では、そのことが少々露骨なまでに示されるのだが、最も典型的なのがラストシーンである。ネヴィルはマサイアスたちに追いつめられ、小さな噴水の中で死ぬのだが、その時彼は、両手を広げ、あたかも十字架にかけられたかのような姿勢で息絶えるのである。

ここまで見ていくと、われわれは、映画「アイ・アム・レジェンド」の公開バージョンが、この映画化2作目「オメガマン」と酷似していることに気付かされる。もちろん途中のストーリーには、両者の間でいろいろと異なる部分があるが、ネヴィルが人類の未来のために、キリストのような殉教者として、自らの命を犠牲にするという結末部分については、2つの映画はほぼ同じ構造をとっている。「アイ・アム・レジェンド」を、何らかの理由でオリジナル・バージョンから公開バージョンに差し替えようとした人物は、ほぼ間違いなく「オメガマン」を参考にしたと思われる。しかし、そのエンディングの差し替えが、あまりに性急だったため、そこにいたるまでの部分との間で齟齬を来すこととなってしまったのであろう。

ここで、「アイ・アム・レジェンド」のオリジナル・バージョンについて話を戻す前に、もうひとつ触れておかなければならないものがある。それは、これらの映画の原作となっている、リチャード・マシスンによる小説『アイ・アム・レジェンド』である。

3-4. リチャード・マシスン『アイ・アム・レジェンド』

それでは、これらの映画の原作である『アイ・アム・レジェンド』とは、そもそもどのような

作品なのであろうか。リチャード・マシスン⁶⁾によるこの作品は、傑作を数多く著した彼の作品群の中でも、とりわけ評価が高く、SF小説の古典的傑作と呼ばれることも多い、彼の代表作である。そのストーリーは、およそ以下の通りである。

謎の疫病の大流行により、大勢の人間が死んでしまった世界が舞台。この疫病に罹った人は、死後、埋葬された後に、吸血鬼としてよみがえり、人間を襲うのだった。ついに疫病に罹っていない最後の人間になってしまったらしい主人公のロバート・ネヴィルは、夜は襲い来る吸血鬼や、疫病感染者たちと闘い、日中は寝ている吸血鬼に杭を打って殺して過ごしていた。彼はまた、疫病に罹った人を治すための抗体作りも試みていたが、なかなか成功しない。そんなある時、彼の前に一人の女性が現れる。彼女によれば、疫病感染者たちは、既に病気が今以上に進行しないようにする薬の開発に成功しており、社会を作って生活しているという。そして彼らは、ネヴィルを、疫病感染者殺害の罪で捉えようとしているというのである。逃げた方がよいという彼女の忠告に従わなかったネヴィルは、結局彼らに捕まってしまう。疫病感染者たちの前で、自らの正当性を主張するネヴィルだったが、その時、視点を彼らの側に置けば、むしろ自分自身が、恐るべき大量殺戮者だったことに気付く。つまり、彼こそが野蛮な旧人類の最後の生き残りであり、その意味で「伝説」の存在だったのである。彼は、まさに自分が処刑されるその時に、そのことに気付いたのだった。自らの正当性を信じて疑わず、四面楚歌状態の中、被害者として恐怖に怯える主人公の視点で、終盤まで物語が進むが、最後になって、むしろ彼こそが「伝説」の大悪人として怖れられる存在だったことがわかるという、価値観の逆転が見事な作品であり、傑作との評判も肯ける作品である。

さて、このように原作を見てみると、実はこれまでの映画化作品は、どれも原作が傑作と呼ばれる所以となっている、この「価値観の転倒」を、全く描けていないことが分かる。しかも、タイトルに含まれる「レジェンド」＝「伝説」の意味も、原作とは全く異なるものに変えられていると言えるだろう。マシスンの原作は、ネヴィルをキリストのような伝説の殉教者として描いたものではなく、むしろ伝説の悪人として殺されていく者として描いていた。これは当然ながら、「宗教的」な作品ではあり得ない。

4. 「アイ・アム・レジェンド」エンディング改変問題

4-1. オリジナル・バージョン

では、オリジナル・バージョンは、公開バージョンと、どのように異なるのだろうか。そっくり内容が変わっているのは、映画開始1時間29分後からラストまでの約6分間の部分であるが、その前のところにも、多少の変更がある。開始1時間13分後には、ネヴィルが、自分がダークシーカーズに襲われた場所を検証する場面があり、そこで彼は、ダークシーカーズには知能も感情もないはずだと、自分に言い聞かせるように話している。しかし、そのシーンは明らかに、ネヴィ

ルの頭に、ダークシーカーズについて自分が持っていた考えは、思いこみに過ぎなかったのかもしれないとの疑念がよぎっていることを示唆している。実際、その直後にある、やはり公開バージョンにはない、室内プールのシーンで、彼はアナの「ダークシーカーズは進化しているのかもしれない」という言葉に、黙って耳を傾けている。

そしてラストの6分間。ネヴィルたちが、実験室の強化ガラスの奥に閉じこめられるシーンである。治療薬の完成を知ったネヴィルは、ガラスに体当たりするダークシーカーズに、「君たちを助けさせてくれ」と語りかける。なおも体当たりを続けるダークシーカーズたち。そこから先が、全く異なる展開になる。先頭に立って体当たりをしていたダークシーカーズのボスらしき男が、突如体当たりをやめ、ガラスに蝶の模様を描き出す。ネヴィルがふと、実験室に捕らえていた女のダークシーカーズの首のあたりを見ると、そこには蝶のタトゥーが。それで彼は、全てを悟る。つまり、ダークシーカーズたちは、彼が治療薬を作るための実験台として捕らえた（誘拐した）女ダークシーカーズ（おそらくはボスの恋人なのだろう）を、取り戻しに來ただけだったのだということ。

ネヴィルは武器を置き、ガラス扉を開ける。そして、治療薬によって「人間化」しつつあったボスの恋人を、再び元の姿に戻し、彼らに引き渡す。明らかに互いの愛を確認し合うような仕草を見せるボスと恋人に対し、ネヴィルは「すまなかった」と謝罪する。恋人を抱きかかえたボスは、ネヴィルに対して責めるような抗議の声を浴びせるが、それ以上の攻撃は加えることなく、仲間たちとその場を立ち去るのだった。

放心状態でひざまずくネヴィルが壁に目をやると、そこには彼がこれまで実験台にしてきた膨大な数のダークシーカーズたちの写真が貼られている。そこで彼は、自分がいかに多くのダークシーカーズたちの命を奪ってきたのか、彼らから見れば、自分がいかに恐るべき殺戮者であったのかに、初めて気付くのである。つまり、「自分こそが伝説の怪物だったのだ(I am legend.)」。

そして、ラスト。アナたちを乗せて車を走らせるネヴィル。車に積んだ無線で世界に向けてメッセージを送るアナ。「ラジオを切らず、この放送を聴いてほしい。君は独りではない(You are not alone.)」。

そして、公開バージョンにあった、生存者のコロニーなどは、全く登場することなく、映画は終わる。

4-2. オリジナル・エンディングの意味

オリジナルがこのようなエンディングであったことが分かると、最初に公開バージョンを見たときに感じた違和感が解消する。特にダークシーカーズの性格付けに関する伏線が、ここではきちんと回収されていることが理解されるのである。例えば、開始46分あたりに、ネヴィルが街中で、その場所にあるはずのないマネキンを発見して驚くシーンがある。彼がそれに近付いていくと、そこには罠が仕掛けられており、それにかかった彼は、危うくダークシーカーズたちの餌食

になりかける。実はこの罫は、ネヴィル自身がダークシーカーズを捕らえるために用いたのと同じものであり、彼らはそれを利用してネヴィルを捕らえようとしたのである。それはつまり、ダークシーカーズたちが単なる化け物（ゾンビ）ではなく、少なくとも一定の知能を持った存在であることを示唆している。このような伏線があるにも関わらず、先述のように、公開バージョンでは、それらは全く回収されることなく、ダークシーカーズはただの怪物として爆殺されて終わるのである。

このようにオリジナル・バージョンでは、ダークシーカーズが実は、知能や社会性や感情を持った生き物であったことが明らかになる。そしてネヴィルも最後にそのことに気づき、謝罪の言葉を口にするのである。それまでの彼は、自分は正義の担い手であり被害者であるという認識を持ち続けてきたのだが、実はそうではなく、自分の方が加害者であり悪だったのかもしれないと気付くわけである。「アイ・アム・レジェンド」という表現は、自分こそが伝説の怪物だったのだというネヴィルの「気づき」を示したものとしてはじめて、意味をなす。仮に公開バージョンのような終わり方をした場合、彼のことを伝説＝救世主と考えるのは、彼以外の人々であることになるから、タイトルは「ヒー・イズ・レジェンド」でなければならない。伝説になったときには、彼は既にこの世にはいないはずだからである。

オリジナル・バージョンのこの終わり方は、主人公の中での価値観の転倒をきちんと描いているという点で、明らかにマシスンによる原作のエッセンスを受け継いでいる。しかも、更に言うならば、そこに「和解」という要素を加えることによって、ある意味で原作を越えるような世界観を提示する作品になっていた可能性もあるのではないかと思われる。以下では、最後に、この「アイ・アム・レジェンド」のオリジナル・バージョンが示唆するものについて、考えてみたい。

4-3. ロバート・ネヴィルとは何者か？

公開バージョンのネヴィルは、「オメガマン」の場合と同様に、イエス・キリストを思わせる存在として描かれていた。しかし、自らの「悪」を悟る、オリジナル・バージョンの彼は、そうした存在ではあり得ない。では、オリジナル・バージョンにおけるネヴィルは、何を隠喩する人物だろうか。結論を先に言うならば、それは「アメリカ」である。より詳しく言うならば、9.11の同時多発テロ以降、アフガニスタンやイラクに侵攻していった、アメリカという国家である。

自分こそが正義だと信じて疑わないネヴィルは、軍隊が残した豊富な武器で重武装して、何の武器も持たないダークシーカーズたちを攻撃し続けるが、これはまさに、アフガンやイラクに展開するアメリカ軍の姿と重なる。最新鋭の武器を持つアメリカ軍は、それらの地で、自分たちよりはるかに劣る武器しか持たない相手、もしくは全くの民間人を、殺し続けているのだ。みな同じに見えるダークシーカーズは、顔の見えない「他者」としてのアフガニスタン人やイラク人なのであろう。そして、そのネヴィルが、ひとりぼっちの孤独な存在であることは、国際社会におけるアメリカの孤立のメタファーと見ることができる。

自分が作った治療薬で、ダークシーカーズを「人間化」しようとするネヴィルの姿は、アフガンやイラクにアメリカ流の「民主主義」や「自由」の理念を植え付け、啓蒙しようとするアメリカの姿と、見事に重なる。

しかし彼は最後になって、すべては自分のひとりよがりであったことに気付き、謝罪する。現実のレベルで言うならば、アメリカが、アフガンやイラクにも独自の文化や考え方があることに気付くということだが、これは未だ実際には起こっていないことである。こうした、いわば文化相対主義的な視点を、アメリカは今に至るまで持つことができないでいる。

問題は、このネヴィルの態度変更に対する、ダークシーカーズの反応である。彼らは、ネヴィルに危害を加えることなく、その場を立ち去る。つまり、彼のことを許したのであって、ここでは両者の間に「和解」が成立しているのである。

マシスの原作では、ネヴィルは吸血鬼たちに処刑されて終わる。確かに結末の衝撃度は、そちらの方が勝っているかもしれない。しかし、今述べたような、現実との対比の中でこの作品を考えるならば、こうした復讐を正当化するような終わり方は、結局のところ暴力の連鎖を予見させるものでしかない。そうではなく、そこで敢えてラストに地味な「和解」という結末を持ってくることで、現実には実現困難な「平和」への道筋を、監督は提示しようとしたのではないか。

先に、映画のオリジナル・バージョンは、原作を越える世界観を提示しようとしたのかもしれないと述べたのは、そういうことである。そうだとすれば、映画の中で流れる最後の科白「君は独りではない(You are not alone.)」も、文字通りの意味に加え、「世界の中にいるのは、君だけではない」＝「世界には多種多様な人々がいるのだ」ということを意味していると、とることのできるのではないだろうか。

5. おわりに

「アイ・アム・レジェンド」が、オリジナル・バージョンで公開されていたら、世間からどのような評価を受けたか、今となっては知ることができないが、少なくとも私自身は、公開バージョンよりもはるかに優れた作品になっていたはずだと考えている。いや、それどころか、SF的な設定を借りた、9.11以降のアメリカに関する自己反省的な映画として、極めて優れた作品になっていたはずだと言ってもよい。しかし実際には、そのかたちで作品は公開されなかった。

エンディング差し替えの背景にどのような事情があったのか、制作サイド（ワーナー）がどのような判断をしたのかは、先述のように、不明である。イラク戦争批判的な含みを持つ作品を世に出すことに躊躇したのかもしれないし、もっと単純に、このような地味な終わり方では、集客が見込めないと考えたのかもしれない。

いずれにせよ彼らは、オリジナル・バージョンを180°ひっくり返し、ハリウッドお得意の、宗教的モチーフ潜在型のキリスト教的映画に仕立てようとし、そして失敗したのである。言うまで

もなく、この「潜在型」を目指すだけで、傑作映画が生まれるわけではなく、そこには様々な前提条件が存在する。このタイプに傑作が多いという認識を、急な差し替えを行った当の人々が持っていたかどうかも定かではないが、そうしたカテゴリーが準拠枠組として存在することが、この傑作を消滅させる一つの要因になってしまったとすれば、それは実に残念なことであると言ほかない。

注

- 1) その代表が、彼にアカデミー賞をもたらした、「シンドラーのリスト」であろう。そこで彼は、ナチスによるホロコースト（ユダヤ人虐殺）をテーマとしている。
- 2) この原作は、かつて同じ出版社から『地球最後の男』というタイトルで出版されていたが、今回の映画化に際して、『アイ・アム・レジェンド』と改題されて、再出版された。
- 3) 「日本人が気づきにくい、映画に込められた旧約・新約聖書の背景と意味をわかりやすく解説」した、充実した内容のサイトであり、基本的には教えられることの非常に多いサイトであるが、以下で述べるように、このサイトの「アイ・アム・レジェンド」評は、少々の外れな内容を含んでいる。
- 4) 以下の考察は、「町山智浩のアメリカ映画特電」第45回エントリー（2007/12/24）[『アイ・アム・レジェンド』と藤子不二雄と「時代は変わる」]を参考している。
- 5) この作品は、左翼的な学生運動やカウンターカルチャーに対する反動が見え始めた、当時のアメリカ社会の雰囲気を反映している点でも興味深い。後に NRA（全米ライフル協会）の会長として、銃規制反対運動の先頭に立つなど、保守派の大物となるチャールトン・ヘストンを主演に据えたところに、既にそうした傾向が現れているし、他にも映画の冒頭に、チャールトン・ヘストン演じるネヴィルが、1969年に行われたウッドストック・コンサートの映像を見ながら、悪態をつくシーンがあるなど、反進歩主義の色調の強い作品である。
- 6) リチャード・マシスン、1926年生まれのアメリカの作家。SF、ホラー、ファンタジーなど、多くのジャンルで、数々の名作を発表した。映画化された作品も多く、『縮みゆく人間』、『地獄の家』（映画タイトル「ヘルハウス」）、『ある日どこかで』、『奇蹟の輝き』、『運命のボタン』などが、その一例である。

<参考文献>

- 井上順孝編、2009、『映画で学ぶ現代宗教』弘文堂
岩本裕子、2003、『スクリーンに投影されるアメリカ―「九月十一日」以降のアメリカを考える』メタブレーション
奥村みさ他、2007、『映画でわかるアメリカ文化入門』松柏社
栗林輝夫、2003、『シネマで読む旧約聖書』日本キリスト教団出版局
栗林輝夫、2005、『シネマで読む新約聖書』日本キリスト教団出版局
佐藤唯行、2008、『映画で学ぶエスニック・アメリカ』NTT出版
長坂寿久、2002、『映画で読む 21世紀―世紀末の映像と来るべき世界』明石書店
服部弘一郎、2003、『シネマの宗教美学』フィルムアート社
藤原帰一、2006、『映画のなかのアメリカ』朝日新聞社
藤原聖子、2009、『現代アメリカ宗教地図』平凡社新書
リチャード・マシスン、2007、『アイ・アム・レジェンド』ハヤカワ文庫
森孝一、1996、『宗教からよむ「アメリカ」』講談社
八尋春海編、1999、『映画で学ぶアメリカ文化』スクリーンプレイ出版
八尋春海編、2007、『映画の中の星条旗―厳選映画100本で見る現代アメリカ社会』フォーイン

Douglas M. Beaumont, 2009, *The Message Behind The Movie*, Moody Publishers

Christopher Deacy, Gaye Williams Ortiz, 2008, *Theology and Film, Challenging the Sacred/ Secular Divide*, Blackwell

<参考ウェブサイト>

The Internet Movie Database (IMDb): <http://www.imdb.com/>

映画データベース— allcinema : <http://www.allcinema.net/prog/index2.php>

映画にみるキリスト教文化と聖書 : <http://movies-bible.seesaa.net/>

町山智浩のアメリカ映画特電 | Enterjam : <http://enterjam.com/?cid=16>